

松村通信第44号

2002年6月17日

松村勝弘

人間が出ていない

原点 「人間が出ていない」とは、若い頃よく言った言葉である。どういうことかという、かつて唯物弁証法だなんだと偉そうに言っていた頃、当時の経済学、マルクス経済学では人間が出てこない、これでは読者の感動を呼ぶことはできない、そういう意味で言っていた。まして経営学ではそれは致命傷だ、そう言っていたものだ。その後ファイナンスなどを勉強していて、近代経済学と言われているものにもそれは共通していることに気づいた。「三つ子の魂百まで」とはよく言ったもので、「人間」の問題はいつも頭の片隅にある。最近改めてこの問題を考える機会を与えてくれた著書に出会った。

21世紀日本の情報戦略 IT・ファイナンスなどといったいわゆる最先端の部分で今や日本はアメリカの後塵を拝している。グローバル・スタンダードの声に踊らされているのは日本独自のIT戦略やファイナンス戦略はとれないのではないかと、最近私はそういう問題意識を持っている。わが国の先端的IT研究者、坂村健氏は、その著『21世紀日本の情報戦略』（岩波書店）で、次のように言われている。グローバル・スタンダードは幻想である。米国はいまだにヤード・ポンド法で、メートル法を使っていない。米国こそグローバル・スタンダードに逆らっても自分の文化を確立しようとしているところに着目すべきだ。にもかかわらず、日本のなかで、変なグローバル・スタンダードという幻想を振りまいている人が多いという（89頁）。ITであれ、ファイナンスであれ、会社であれ、人間の作り出すものである。生身の人間（われ

われの場合日本人）がいてそれが考え出したものである。それを利用するのもそういった生身の人間である。だから米国の表面だけ日本に持ってきてもうまくいくはずがない。

「米国の技術やビジネスモデルが最先端だとしてまねしても決してうまくいかない。とくに米国で中途半端に表面だけ勉強して帰ってきた人たちは、米国のシステムが全く理想的に見えてしまう。それをそのまま日本に持ち込んで、うまく行かないと日本の社会システムが悪い、すべて米国のシステムにせよと言う。米国のインターネット・ビジネスはドット・コムからインフラまでどんどん破綻している。それをまねた日本のネット企業の多くは苦戦している。隣の芝生は良く見えるものだが、どこの国、地域でも通じるような理想的な制度はない。ITは文化の差があらわれる部分までつまり生活の隅々まで入ってくるものである。ITにおいてこそ、より一層グローバル・スタンダードは幻想なのである。」（91頁）

いまこそ、日本の文化と何なのか、日本の文明はどういうものか、勉強しておく必要がある。坂村氏の紹介されている著書もそういう意識で読む必要がある。

漢字と日本人 坂村氏の紹介されている高島俊男『漢字と日本人』（文藝春秋）は、日本人、日本文化、日本文明を考えるのに参考になる。日本人は元来大和言葉でしゃべっていた。ところが漢字が入ってきて、いわば貸衣装で日本語を表現するようになった。また、その後ますます漢字をも利用するようになって、今や漢字を廃することができなくなっている。漢字を利用しないと表現できないことが多くなっている。そういうのが今の日本人であり、日本文化であり、日本文明となっている。ところが明治の文明開化の時代と、第

2次世界大戦後の二度にわたって、西欧崇拜から漢字を捨てようという動きがあった。それは日本文化を捨てることになる。日本人のアイデンティティ・伝統を捨てることになる。なぜなら「文字は過去の日本人と現在の日本人とをつなぐものである」(227頁)からである。伝統とは「過去と将来を一貫する」「過去の日本人と将来の日本人とを切断しない」という意味である(230頁)。

私はよく講義などで、昨日があって、今日があり、そして明日があるものだ、明日は無からは生じない、と話すことがある。これを忘れて、明日を語る手合いがいる。そういう「明日」は実はないと思う。過去を知り、これを改善することはできるが、過去を捨てて明日を語ると、それは明日でも何でもなく、混乱以外の何者でもなくなる。それはいずれは衰退への道であると思う。時間を切り取って今だけを考えるのは間違いだろう。そう言う手合いに将来はない。今だけを考え将来の世代に環境破壊という付けを回す、それが西欧型合理主義かもしれない。

大江戸庶民事情 坂村氏の紹介しているもう一冊の著書を紹介しておく。石川英輔『雑学「大江戸庶民事情」』講談社、がそれである。江戸時代というのは何もかも暗黒の時代だという誤解がある。明治政府は江戸幕府を倒して政権をとったので、江戸時代を否定する。また、戦後民主主義を信奉する人たちも進歩的歴史観から、江戸時代を否定的にとらえがちである。そうではなく、虚心坦懐素直に江戸時代を見ると、それなりに合理的であった、というのが本書の言うところである。江戸時代は、共生という言葉がない時代だったが、まさに環境に優しく、かつそれなりに合理的な社会を形成していた。当時、隅田川で白魚がとれたという。江戸前で魚や貝が十分とれた。いかに環境がよかったか。

また水道など、当時のロンドンやパリ以上であった。そういえば、神田上水、玉川上水など聞いたことがある。識字率は、当時世界一であったろう。寺子屋などが普及していた

からである。まして、当時のヨーロッパは戦乱続きであったが、日本は極めて平和で、庶民が安全に旅行できたという。戦国時代の織田軍は、そのまま当時のヨーロッパに行っても勝てるほどの軍事力を持っていたが、江戸時代は平和になり、火薬の活用法として花火が発達したという。日本の花火は、だから、世界一である。医術なども、当時としては西洋より進んでいた。医学、解剖、というレベルでは西洋は進んでいたが、医術は必ずしもそうではなかったという。

それと進んでいる、遅れているという言い方も問題ではある。先進国、後進国という区別(発展途上国といっても同じである)は、これも考えてみればおかしな言葉である。何をもって進歩というか、極めて勝手な分類であることは間違いない。「先進国型の豊かな社会とは、人間の労力の代わりに膨大な資源とエネルギーを消費する破滅型の社会なのだ」という認識(17頁)が必要だという。「膨大なエネルギー消費や環境破壊によって将来にツケを廻しているだけ」(17-8頁)かもしれないからだ。まさに、将来を考えずに今だけよければよいという考え方が環境破壊をもたらしていることは間違いない。それとの対比で言えば、江戸時代はなかなかよくできた社会であったといえるわけだ。今のわれわれからすれば、かなり不便な社会だろうが。

これらの主張すべてを絶賛するわけではないけれども、物事を相対化してみる必要はある。進歩史観の行き過ぎをただす必要がある。英米中心主義をグローバル・スタンダードと称して崇拜するのもおかしなものだ。そこからは、わが国の、われわれの、戦略は生まれなくてこないことは確かだ。

メールを見て下さい。又何でも意見を。

皆さんの意見を歓迎します。また、メールで意見交換しましょう(matumura@ba.ritsumi.ac.jp)。メールをよこして下さい。個研 Tel(077) 561-4645FAX 兼用